

日中戦争から太平洋戦争の時代

山形県の戦没者38,000人

山形県調べによると、先の大戦での山形県の戦没者は約38,000人に上っている。

戦争の発端は、昭和6年(1931)の満州事変だった。翌年の満州国建国により、満州を支配下に置いた日本は、同12年(1937)からの日中戦争で、さらに中国大陸進攻を推し進め、国内の戦時体制も本格的に整えられていく。

昭和16年(1941)12月8日、イギリス、アメリカに対して宣戦布告し、ハワイの真珠湾を攻撃。太平洋戦争が始まる。日本は、短期間でタイを除く東南アジア全域に支配を広げていった。

しかし、昭和17年(1942)6月のミッドウェー海戦で、海軍が壊滅的な打撃を受ける。同19年(1944)になると、サイパン島がアメリカ軍に占領される。アメリカ軍は、ここを基地として日本本土への空襲を行った。

昭和20年(1945)4月、アメリカ軍が沖縄に上陸。8月には広島、長崎に原子爆弾を投下する。さらにソ連軍が中立条約を破って参戦し、満州・朝鮮方面で攻撃を開始する。こうしたなかで、ついに日本政府は降伏を決定し、8月15日に終戦となった。

徴兵検査を受け入隊

終戦までの日本では、徴兵制度により、徴兵適齢者（前年の12月1日から当年11月30日までに満20歳に達する男子）は、徴兵検査を受けなければならなかった。

徴兵検査には身体検査と筆記テストがあった。身体検査の成績は弱視や身体虚弱、病歴などの条件によって甲・乙・丙・丁・戊の5種に区分され、身体強健で身長5尺2寸（157.6cm）以上の男子は、甲種として現役入隊した（陸軍2年、海軍3年）。

入隊が決まると盛大な壮行式が行われ、家族や職場、親族、近隣の人たちが寄せ書きをした日章旗や、千人針を持って出征した。

戦局が激化し兵力が不足するにつれ、兵役を終えた年配者も出征していった。昭和18年(1943)には、理・工・医・教員養成以外の高等教育機関に通う20歳以上の学生が徴兵され（学徒出陣）、翌19年(1944)には、徴兵適齢が19歳に引き下げられた。

兵士の武装も物資不足のため粗末になり、見送りも簡素になった。



酒田駅で見送られる出征兵士

盛大に見送られた出征兵士

酒田から出征する兵士は、酒田駅前の八雲神社で「武運長久」を祈ってから、出征祝幟を立て、中学生のブラスバンドを先頭にして酒田駅まで行進した。沿道は「日の丸」の小旗を持った大勢の市民で埋め尽くされ、「バンザイ」の声が響いた。小学生は日に2、3回も見送りに出かけた。

昭和14年(1939)に出征した人の手記には、酒田市役所での「出征兵士の励まし会」や、本間家の座敷での酒宴など、盛大にもてなされたと書いてある。



酒田駅までの出征兵士の行進

戦時下の主な出来事 昭和6年(1931)～昭和20年(1945)

年	国内外の出来事	酒田の出来事
昭和6年 (1931)	満州事変(9月)	
7年 (1932)	満州国建国(3月)	
8年 (1933)	国際連盟から日本脱退(3月)	市制実施により酒田町から酒田市になる(4月)。
11年 (1936)	二・二六事件(2月)	酒田市防護団発会(9月)。 防空演習始まる。
12年 (1937)	日中戦争始まる(7月) 国民精神総動員運動始まる(9月)	鉄興社大浜工場が設立(5月)。翌年より操業。
13年 (1938)	国家総動員法公布(4月) 満蒙開拓青少年義勇軍の入植始まる	中等学校生徒による農村の勤労奉仕が始まる。
14年 (1939)	米穀配給統制法公布(4月) 興亜奉公日が実施される(9月) 第二次世界大戦始まる(9月)	酒田市警防団を設立(4月)。 県主催の郷土演芸慰問団が北支戦線各地を慰問(8月)。 東亜軽金属酒田工場(帝国マグネシウム)が発足(9月)。 高砂海岸に防空監視哨を設置。
15年 (1940)	日独伊三国同盟締結(9月) 大政翼賛会が設立(10月) 紀元2600年記念式典(11月) 隣組制度始まる 砂糖・マッチの切符制始まる	日本有機(花王)が大浜に設立(5月)。 酒田日満技術工養成所設立(6月)。 県内のダンスホールが一斉に閉鎖(10月)。 市役所に物資統制課を新設(11月)。 大政翼賛会酒田支部結成(11月)。
16年 (1941)	国民学校令公布(4月) 生活必需物資統制令公布(4月) 米穀配給制始まる 真珠湾攻撃。太平洋戦争始まる (12月8日)	酒田興亜国防大博覧会開く(7月～8月)。 県一紙制により山形日報、荘内日報、鶴岡日報が山形新聞に合併(12月)。
17年 (1942)	マニラ・シンガポール占領(2月) 食糧管理法公布(2月)	酒田市航空青少年隊発会(5月)。 帝国石油山形鉱業所設置(8月)。
18年 (1943)	ガダルカナル島撤退(2月) 学徒戦時動員体制確立要綱決定(6月) 第1回学徒出陣(10月)	帝国マグネシウム酒田工場が設立(4月)。 企業整備が行われ、残存店舗は配給所となる(5月)。 小中島に国策会社・山形造船株式会社が設立(6月)。 飛島に警備隊が置かれる(7月)。
19年 (1944)	サイパンの守備軍全滅(6月) 学徒動員令公布(8月) レイテ沖海戦で連合艦隊が事実上壊滅 (10月)	隣組組織を通して募金した軍用機を献納(6月)。 東京都国民学校集団疎開児童を受け入れる(8月～10月)。 暁部隊など、陸外軍部隊の酒田駐屯が始まる。
20年 (1945)	東京大空襲(3月) 米軍、沖縄本島に上陸(4月) 米軍、広島に原爆投下(8月6日) 終戦(8月15日)	光ヶ丘と宮野浦に高射砲陣地を構築(6月)。 米軍B29が酒田港一帯に機雷を投下(6月30日)。 後に湾浚渫船阿賀丸が機雷に触れて爆沈。 空襲に備えて建物の強制疎開を実施(7月)。 酒田空襲(8月10日)。

戦時下の少年たち

戦時下の酒田中学校

戦前の山形県立酒田中学校（現在の酒田東高等学校）の制服は、白線2本が入った黒い帽子に、黒く太い鼻緒の朴齒（ほおば）の下駄だった。旧制高等学校をまねたこの制服は、小学生のあこがれだったが、昭和16年（1941）の入学生からはカーキ色の戦闘帽に代わった。兵隊のような背囊（はいのう）を背負い、脚にはゲートルを巻いた。

8月には学校学友会（現在の生徒会）の名称が学校報国団に改められ、農繁期の農家で勤労奉仕を行った。

この年から、軍関係諸学校への進学希望者を対象に、朝と放課後に学校補習授業を行い、多くの合格者を出している。

戦況が悪化し、学徒通年動員が実施された昭和19年（1944）の7月からは、4・5年生は群馬県の中島飛行機株式会社小泉製作所に動員された。3年生は、8～11月に神町の海軍飛行隊飛行場（現在の山形空港）の建設に動員。その後、終戦まで大浜の帝国マグネシウムなどで働いた。昭和20年（1945）3月、戦時繰り上げ卒業により、5年生と4年生が同時に卒業する。4月以降もその多くが勤労働員され、港湾荷役や防空壕掘りの作業を行った。

8月、扶桑（ふそう）樽会社の工場が、ガソリンを入れる木製ドラム缶製造のため、学校の武道場に疎開。しかし、生産作業に入る前に終戦を迎えた。



酒田中学校の行軍訓練（昭和13年ころ）

群馬県・中島飛行機への学徒動員

昭和19年（1944）7月から翌年3月まで、酒田中学校の4・5年生は群馬県の中島飛行機小泉製作所に動員され、戦闘機の整備や試作の仕事に従事した。秋田、新潟の中学生も動員されていた。以下は、ゼロ戦の整備班で働いた酒中卒業生（当時4年生＝16歳）の体験談である。



酒中4年生（昭和19年、中島飛行機製作所で）

毎日、寮から工場まで2kmほどの道のりを歩いて通い、油がビュンビュン飛んでくる中で、油まみれになって働きました。

食事は、アルミの食器にご飯、漬物、卵、煮つけなどを載せたもの。量は少なく、いつも腹が減っていました。腹をこわして食べられない生徒がいるとご飯が残る。それを採って食べたものです。工場までの道は畑の中にあっただので、収穫されずに腐る寸前になっていた大根やサツマイモを取って、生のまま食べたりもしました。

友達のお親から笹巻などが送られてくると、みんなで食べた。とてもおいしかったです。

工場は攻撃を受け、機銃掃射を何度も体験しました。雨の夜に布団をかぶって、ずぶ濡れになって避難したこともあります。東京大空襲の時は、寮から火の手が見えました。

繰り上げ卒業後は、一年制の実務科生として学校に残りました。学校に疎開してきた工場で働くのが一番の目的でできた科のようでした。学校工場ができるまで、酒田港で石炭運びなどの港湾荷役に動員され、工場が完成する前に終戦を迎えました。

戦時下の酒田商業学校

大正14年(1925)から、全国の学校に陸軍現役将校が配属され軍事教練が始まる。酒田商業学校(後の山形県立酒田商業高等学校)では、それ以前から嘱託の将校による教練を実施していたが、より本格的な教練を行うようになった。

満州事変、満州国建国により、一般市民の大陸への関心が高まりを見せてきた昭和8年(1933)、支那語(中国語)科を導入した。

昭和13年(1938)から勤労奉仕が始まり、同16年4月(1941)、しもふりの制服がカーキ色に変わる。翌17年(1942)からは戦時繰り上げ卒業が始まる。

昭和18年(1943)、文部省は全国の男子商業学校を工業・農業学校に転換する方針を立てる。

酒商は昭和19年(1944)4月から工業学校になり、商業科の募集を停止。商業科2年生は強制的に工業科に切り替えられた。

この年から学徒通年動員により、5年生は鉄興社、4年生は帝国マグネシウムなどで働いた。2・3年生は帝国石油などに動員。残った1年生は近郊の農作業奉仕か学校農園の作業に当たった。

昭和20年(1945)2月、工場疎開により、校舎は東京藤浪航空株式会社の工場にされたが、操業前に終戦となった。生徒たちはそのまま10月まで農作業奉仕に当たった。

翌年から商業学校生徒の再募集が始まる。



農家で勤労奉仕をする、笑顔の酒商生たち(昭和13年ころ)

義務化された軍事教練

中等学校以上の男子を対象に軍事教練が始まったのは、大正14年(1924)から。「陸軍現役将校学校配属令」の公布により、公立の中学以上の教育機関に陸軍現役将校が配属され、指導に当たった。翌年からは、青年訓練所(小学校を卒業した男子勤労青少年を対象とした社会教育機関)でも実施した。

第一次世界大戦後の軍縮傾向のなか、余剰になった将校の仕事を確認することと、学生の思想対策、軍国主義の基盤を拡大したい意図が背景にあった。

国策として行われた男子中学校でのグライダー訓練

昭和12年(1937)、新し物好きの酒田に「酒田航空研究会」ができ、全国に先駆けてグライダーの練習が始まった。練習場所は宮野浦の砂丘(現在は最上川カントリークラブ)だった。

翌13年(1938)、文部省が中等学校におけるグライダー滑空練習についての実施要項を定め、酒商に滑空部ができた。酒中にも同じ年に創部した。また、宮野浦の練習場にグライダー格納庫が建設されたが、後に軍に接收されている。

昭和17年(1942)、文部省が全国の男子校に文部省一型初級機を配置したことにより、酒商の滑空訓練も本格的になった。しかし終戦後、連合軍総司令部(GHQ)の禁止命令により廃止された。

戦時下の国策で生まれた滑空部だが、当時のグライダー少年たちは純粋にグライダーを愛し、大空を飛ぶことにあこがれていた。



酒商に配置された文部省一型機

10代の若者が満州に入植した満蒙開拓青少年義勇軍

青少年の満州移民は昭和12年(1937)に計画され、翌年から「満蒙開拓青少年義勇軍」の募集が始まった。10代の青少年を満州に移住させて開拓にあたらせる国策であり、数え年で16歳から19歳までの青少年が対象となった。

募集された少年たちは、茨城県の内原訓練所で2～3カ月の訓練を受け、満州へ移住。さらに現地の基本訓練所で1年、各種実務訓練所で2年の訓練を受け、開拓村に入植した。

終戦までに、全国から86,000人が送り出され、物資不足や酷寒に耐えて開拓に励んだが、敗戦直前のソ連の対日参戦により、多くの隊員が犠牲になった。

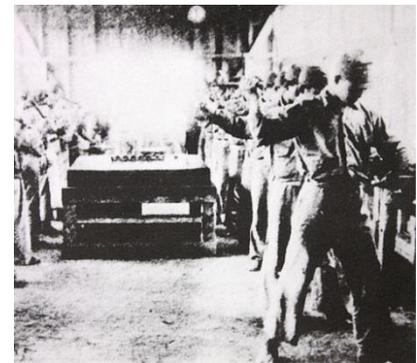
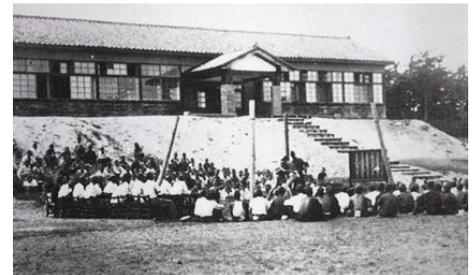


満蒙開拓青少年義勇軍の絵はがき

満州の工業技術者を育てた酒田日満技術工養成所

昭和15年(1940)、満州国の工業技術者を養成するための「酒田日満技術工養成所」が設立された。満州国産業部の計画により、福岡県、秋田県に開校し、新潟県に3校目ができる予定だったが、酒田出身の大川周明の働きかけで酒田に誘致した。校舎は豊里にあった。

昭和19年(1944)に日満工業学校と改称。卒業生は満州国に就職した。敗戦とともに解散した。



酒田日満技術工養成所

戦後、鳥海山麓を開墾した義勇軍訓練生

敗戦により、満蒙開拓青少年義勇軍の内原訓練所(茨城県)は解散した。大陸に行けなくなった訓練生は帰村したり、国内各地に入植した。

このうち、余目出身の教官・石塚忠一が率いた石塚中隊の一部で、県内出身者を中心とする16～18歳の少年60人が、食糧増産隊として旧八幡町の大台野(鳥海山麓南斜面)に入植した。昭和20年(1945)9月のことである。

しかし、一人前になった隊員の結婚相手が見つからないことや、畑作による営農が難しかったことなどから、山を下りる隊員が出てきた。結局、入植から15年目に八幡町の町営牧場となった。

昭和55年(1980)、満州で敗戦を迎え非業の死を遂げた石塚中隊の隊員50余名を偲び、この場所に「拓魂の碑」を建立し、毎年8月に慰霊祭を行っていた。



旧八幡町の大台野地区にある「拓魂の碑」

戦時下の子どもたち

戦時下の小学校

昭和16年(1941)4月、それまでの「尋常小学校」は、国民学校令の公布により「国民学校」と改称された。

授業は、従来の教科を、国民科(修身、国語、国史、地理)、理数科(算数、理科)、体錬科(体操、武道)、芸能科(音楽、習字、図画及工作、裁縫)の4教科に統合。男子は木銃訓練などの教練を受けるなど、戦時体制に合わせた教育が行われた。

戦況が厳しくなると、小学生も薪(まき)拾い、イナゴ取り、ウサギ送り消火訓練の様子(右)の飼育などの勤労奉仕をさせられた。



第一国民学校(琢成小学校)の木銃訓練(左)と、第三国民学校(浜田小学校)のバ

学童疎開の受け入れ

アメリカ軍機による本土空襲が本格化した昭和19年(1944)、閣議決定により学童の集団疎開が始まる。

旧酒田市には、東京都城東区砂町国民学校の児童が割り当てられ、8月に138人、10月に36人が疎開してきた。疎開児童は市内7カ所の旅館に泊まり、第一国民学校(琢成小学校)と第三国民学校(浜田小学校)で授業を受けた。

市では、この年の9月に「酒田市集団疎開本部」(後に酒田市集団疎开学童後援会と改称)を設け、疎開児童に関する連絡斡旋、後援事業を行っている。

同年12月末までに受け入れた疎開児童数は、縁故疎開も含めて1,431人に達した。

酒田にも空襲の危険が迫ってきた昭和20年(1945)6月、市内児童の縁故疎開が始まり、周辺の村々に縁故者を頼って疎開していった。終戦直前の8月には縁故者のいない児童も疎開した。

この年の『酒田市事務報告書』によると、県の指示で郡内各町村に疎開させられた市内国民学校初等科の児童数は、在籍児童6,264人の82%にあたる5,122人に達した。



食事をする疎開児童



疎開してきた砂町国民学校の児童

戦時下の少女たち 1

戦時下の酒田実科高等女学校

酒田市立酒田実科高等女学校（後の酒田中央高等学校）は、皇紀2600年記念事業として、昭和15年(1940)4月に、琢成尋常高等小学校の校内に開校した。

すでに戦時下であり、開校後すぐに食糧増産のための最上川河川敷の開墾作業や、鳥海道場（※）での宿泊訓練が始まり、翌年から農繁期の勤労奉仕を行っている。

昭和18年(1943)4月、酒田琢成高等女学校と改称。勤労奉仕は農作業にだけにとどまらず、8月には男子中学生とともに、酒田港での石炭運搬に従事した。翌年4月には女子勤労挺身隊として東芝川崎工場に動員され、終戦まで続いた。8月からは鉄興社大浜工場での通年動員も始まった。

昭和20年(1945)8月10日、酒田空襲で校舎が破損した。生徒たちは瓦礫(がれき)の片付け作業に当たるなかで、終戦を迎えた。

※鳥海道場…酒田中学卒の思想家・日高一輝が中等学校生の精神修養を目的に鳥海山麓に設立。



昭和17年、農繁期の勤労奉仕

戦地の出征兵士に送った「慰問袋」

戦時中、出征した兵士を慰め、元気づけるため、戦地に「慰問袋」が送られていた。袋の中身は慰問状、お守り、薬品、日用品（石けん、ちり紙など）、缶詰、写真など。袋は手ぬぐいなどで手作りしたほか、市販品もあった。

日露戦争の時に、出征軍人家族慰問婦人会、愛国婦人会など作ったのが始まりといわれる。

出征兵士の増加により、学校でも慰問袋作りが行われるようになった。

下の写真は、日中戦争時代に酒田から大陸に出征した兵士が、自分に送られてきた慰問袋の中身を撮影したもの。

慰問状のほか、梅干しなどの缶詰、ドロップ、キャラメルなどのお菓子、将棋と囲碁の簡易ゲームなど、バラエティに富んでいる。「日の出ウキスキー」と書かれた箱の中身は本物のお酒だったのだろうか。



慰問袋を作る実科高女生(昭和17年)



戦時下の酒田実科女高等学校 年表

年	月	出来事
昭和15年 (1940)	4月	・酒田市立酒田実科高等女学校設立。
	5月	・埋立地にてグライダー見学(24日)。
	7月	・中瀬埋立地(最上川河川敷)開墾。ネギ、ソバ、大豆、小豆を植え、食糧増産始まる。 ・鳥海修練道場宿泊訓練(9月にも)。
	9月	・酒田市警防団と防空演習(3日)。
	11月	・皇紀2600年記念行事(旗行列・奉祝御製最上川奉唱音楽会・日枝神社参拝)。
	12月	・奉仕作業で、青年団の肩章及び腕章を作る(13日)。
16年 (1941)	3月	・李満州国大使が来酒。生徒は駅前に整列歓迎(15日)。
	4月	・満州開拓義勇軍太田中隊が来酒。市内各校とともに歓迎式を行う(25日)。
	5月	・埋立地開墾と種まき作業(11月収穫)。 ・農繁期勤労奉仕作業(9月、10月にも)。
	6月	・鳥海修練道場宿泊訓練(9月にも)。
	7月	・支那事変4周年記念週間(時局講話、出征兵士への慰問文発送など)。
	12月	・米英に対する宣戦布告を受け、日枝神社参拝(8日)。
17年 (1942)	4月	・農場整地作業。
	6月	・農繁期勤労奉仕(9月、10月にも)。
	7月	・2年生と専攻科が初めての執銃訓練を行う。
	8月	・耐熱行軍(29日)。
	9月	・防空教育訓練実施報国隊が結成され、防空教育訓練始まる。
	10月	・2年生と専攻科が「聖地参拝旅行」(靖国神社・伊勢神宮など)。
	12月	・大東亜戦争1周年記念週間(軍人援護徽章及び絵葉書街頭販売奉仕)。 ・防空演習(11日)。
18年 (1943)	1月	・両羽橋まで耐寒行軍(26日)。
	4月	・酒田琢成高等女学校と改称。 ・学校特設防衛団を編成。 ・毎月3日間「修練」を行う(時局講話・歩行訓練・体操・生花・茶道・礼法・マッサージ・音楽)
	5月	・2年生と専攻科は十里塚海岸、1年生は白木海岸へ行軍(4日)。 ・琢成農場始耕式(10日)。
	6月	・農繁期勤労奉仕(9月、10月にも)。
	7月	・光ヶ丘運動場から能登興野方面に行軍(9日)
	8月	・学校報国隊協力令により、酒田港湾株式会社で石炭運搬。(2日～8日)。 ・今野校長が、満州義勇軍教学本隊として満州国に出張(31日～9月26日)。
	11月	・六つ新田方面で野外訓練、(4日)。 ・24キロ行軍。所要時間4時間48分(15日)。 ・学徒出陣壮行式・市街行進・神社参拝。
	12月	・軍用機「酒田号」献納資金に職員生徒一同寄付。
	19年 (1944)	4月
5月		・生石・大平方面に全校行軍(9日)。 ・両羽橋と実生橋との間にヒマを植える(16日)。※種からヒマシ油を取るため。 ・鳥海修練道場宿泊訓練(6月にも)。
6月		・農繁期勤労奉仕。
8月		・2年生と専攻科が鉄興社大浜工場に通年動員。
11月		・鉄興社通年動員生徒のうち通勤困難な27名が、善導寺に宿泊(16日～)。

20年 (1945)	4月	・校庭4カ所に退避壕を掘る(13日~17日)。
	5月	・両羽橋方面へ行軍(8日)。
	6月	・農繁期勤労奉仕(7月、9月、10月にも)。
	7月	・元本校挺身隊の卒業生が平塚海軍工廠(こうしょう)で戦災死の通知あり(26日)。 ・校舎を東北三三九八部隊に貸与。
	8月	・両羽橋方面で「ぬかぼ」採集。※イネ科の二年草で兵服の材料にされた。 ・酒田空襲、校舎大破損(10日)。翌日より生徒が片付け作業。 ・終戦(15日)。 ・平塚海軍工廠出動中の卒業生4名帰る(20日)。 ・鉄興社大浜工場で学徒動員の解散式(22日)。
9月	・授業開始(5日)。	

※『酒田市立酒田中央高等学校創立五十年史』を基に作成



昭和17年、実科高女の銃剣術訓練



昭和17年、グライダーに試乗する実科高女生



昭和18年六ツ新田方面での野外訓練

防空演習と灯火管制

昭和12年(1937)4月に公布された「防空法」により、軍人以外の民間人に、空襲を想定した訓練や監視、灯火管制などの実施が義務付けられた。

酒田ではすでに前年に、防空のための組織として「酒田市防護団」を発足し、防空演習を行っている。常備消防体制も整え、昭和13年(1938)に「酒田市消防組」を組織。翌14年(1939)の「酒田市警防団」発足につながった。

訓練当初、家庭では灯火管制訓練を中心に行っていたが、13年11月からは、組織化されて防火訓練に参加している。防火訓練は、防空演習の重要事項であり、町内や職場などさまざまな場所で行われた。国民学校でもバケツ送りや消火訓練などを実施している。

灯火管制については、市の広報などで徹底を図り、「灯火管制用具懸賞募集」で一等になった遮光用具の見取り図と使用法を知らせ、その作製をすすめている。



防空演習の様子

2度の空襲を受けた酒田

戦況が悪化の一途をたどっていた昭和19年(1944)の終わりころから、連合国軍による日本本土への空襲が激化していった。酒田は、終戦間際に2回の空襲を受けた。

1回目は、昭和20年(1945)6月30日、夜中の午前0時30分頃(日付は変わっているので正確には7月1日)。物資輸送の要である酒田港を封鎖するため、アメリカ軍のB29約10機が、港一带に54個の機雷を投下したと推測されている。

この攻撃により、帝国マグネシウムの従業員が重傷を受けたが、それ以外の直接的被害は小さかった。しかし、その数日後、浚渫船(しゅんせつせん)阿賀丸(52トン)、東雲丸(70トン)などが機雷に触れて沈没。阿賀丸では死者1人と重軽傷者を出している。

2回目は終戦5日前の8月10日、午前9時30分頃から午後0時5分まで。アメリカ軍の艦載機グラマンF6Fが2回にわたり飛来した。飛来機数は1回目16機、2回目11機の計27機。

大浜工場地帯、港湾、山形造船、酒田第一国民学校(現在の酒田市総合文化センター)、四ヶ浦漁業会(現在の県漁協)、酒田駅付近、両羽橋などに激しい銃爆撃を加え、57キロ爆弾32個を投下した。

これにより、第一国民学校は大破し、四ヶ浦漁業会は炎上。港湾施設も多くの被害を受けた。人的被害は、死亡16人、行方不明14人、重傷15人、軽傷18人にのぼった。

この日、光ヶ丘に構築中の高射砲陣地で試射を行う予定だったが、いきなり実戦となった。



第一国民学校(琢成小学校)に落ちた爆弾片と銃弾

当時、第一国民学校内にあった酒田青年学校の校長を務めていた石垣榮治郎氏が保存していたもの。本人による書付には、「グラマン3機の爆撃を受け、琢成校舎に1発、東の礼法堂(倒壊)に1発、中庭に1発、西側の本慶寺との境の電柱変圧器近くに落下、かつ機銃掃射を受けた」と記してある。

光ケ丘に設置された高射砲

戦時中、港湾地区の大浜には鉄興社などの軍需工場ができ、酒田港は輸送基地として戦争遂行に重要な役割を果たしていた。昭和19年(1944)、本土決戦が叫ばれるようになると、暁部隊をはじめ、陸海軍部隊が続々と酒田に駐屯を始めた。

昭和20年(1945)6月、独立高射砲第48大隊第1中隊の144人が、8cm高射砲6門とともに酒田に派遣され、光ケ丘の松林の中(現在の親子スポーツ会館周辺)に陣地の構築を開始した。酒田高等女学校の校舎の一部を宿舍とした。

宮野浦でも、同大隊第4中隊が陣地の構築を始めたが、秋田の油田地帯及び港湾防空の任務を受け、土崎港に移動した。

8月10日、完成した光ケ丘の高射砲陣地で公開試験射撃を行う予定だったが、空襲のため実戦となった。しかし、陣地構築に追われて十分な訓練もしておらず、大砲はB29の高高度を目標に製造されていたため、小回りのきく小型機の射撃には不向きだったことから、命中しなかった。

終戦前日の14日には、土崎港が爆撃された。宮野浦から配置転換された第4中隊が直撃弾を受け、犠牲者を出している。



独立高射砲第48大隊第1中隊



戦没画学生 岡部敏也

豊かな画才を持ちながら25歳で戦死

大正9年(1920)、酒田市元米屋町(現在の一番町)の染物店に生まれ、11歳ころから旧平田町砂越の日本画家の田中恵泉に師事する。

昭和8年(1933)に酒田商業学校に入学。光丘文庫の要請で「素戔鳴尊(すさのおのみこと)東征図」を描き、秩父宮・同妃殿下の台覧に供する。同11年(1936)、全国中等学校絵画展覧会で「木蓮」が入選し、翌年に「出陣」を制作した。

昭和14年(1939)、東京美術学校(現在の芸大)日本画科に入学。荘内館で寮生活を送りながら、絵の制作に没頭した。

昭和18年(1943)、日本画院展に出品した「農婦」が、日本画院賞を受賞し、美術学校の買い上げとなる。大日美術院展でも入選を果たし、「知秋」が第6回文展(現在の日展)に入選する。卒業制作の「山びこ」は優秀賞と河合玉堂賞を受け、9月に首席で卒業する(戦時繰り上げ卒業)。

しかし、それから間もない10月、山形連隊に入隊して出征。終戦から11日後の昭和20年(1945)8月26日、ソ連軍との戦闘により旧満州で戦死した。

29年後の昭和49年(1974)、戦没画学生を題材にしたNHKのテレビ番組で取り上げられ、同52年(1977)と平成9年には本間美術館で遺作展が開催されている。



「出陣」の前でパレットを持つ酒商5年生の岡部敏也

「知秋」制作時のエピソード

ナスを収穫する女性を描いたこの絵のナス畑は、食糧難のために、岡部敏也が寄宿していた荘内館のテニスコートに造られた畑だという。

モデルを務めた女性は、酒田出身で、荘内館の寮母として働いていた原田ヨシエさん。岡部家と原田家は筋向いにあり、家族ぐるみの付き合いをしていた。美術学校3・4年生時代の敏也は、農婦を多く描いていたが、そのほとんどのモデルがヨシエさんだった。

敏也は、あまり大きくない作品は荘内館の会議室で描いていたが、知秋は大きな作品だったため、荘内館近くの円勝寺の本堂を借りて制作していた。

制作中の様子を写した写真には、ナスとはさみが入ったざるが写っているが、制作当初は、はさみではなく包丁を入れていた。ちょうどその頃、酒田から上京してきたヨシエさんの義兄・八郎さんに、「ナスを採るのは、はさみでないと」と指摘され、はさみに変えたそうだ。

完成した絵では、ざるにはナスが2個入っている。はさみは女性が右手で持っている。



昭和18年制作の「知秋」と作品制作中の岡部敏也

戦時下の少女たち 2

戦時下の酒田高等女学校

山形県立酒田高等女学校（現在の山形県立酒田西高等学校）では、昭和14年(1939)から農家での集団勤労作業奉仕が始まった。その回数は同16年(1941)には年4回、18年(1943)には年6回に増えていった。学校でも食糧増産のため、校庭や、大浜地区の砂丘地を開墾した報国農場などにサツマイモやジャガイモ、大麦、小麦、大豆などを栽培した。

昭和16年から全校行軍が始まり、17年の夏には、学校から吹浦海岸まで往復10里の夜間行軍を実施。1キロの砂袋を背負って歩いた。18年からは鍊成登山も始まる。

昭和19年(1944)から学徒通年動員が始まると、8月から校舎が陸軍被服本廠(ほんしょう)仙台出張所直属の酒田学校工場に転用され、3・4年生全員が動員された。さらに校舎は昭和20年(1945)6月からは、光ヶ丘に高射砲陣地を建設するために配属された高射砲部隊の宿舎としても使用された。宿舎の設営のために、生徒たちも松枝の片付けなどに奉仕した。

8月、空襲から逃れるために西荒瀬小学校に縫製工場を疎開するが、10日足らずで終戦を迎えた。



学徒動員により、酒田港で石炭運びをする酒田高女生



報国農場で作業する酒田高女生



昭和17年、酒田高女「聖地参拝」。聖地参拝とは修学旅行のこと。この年に呼び名が変更され、翌年には修学旅行そのものが中止された。

航空機の燃料確保のため松根油を供出

松根油は、松の根株または松枝から得られる油。テレピン油やクレオソート油の原料として、昭和9年(1934)ころから生産が始まった。最初は採算が合わなかったが、戦局が悪化し石油の輸送が困難になると見直された。

松根油を2回蒸留して得られる精製1号テレピン油は、高高度を飛行する航空機の燃料として貴重だった。全国に生産が割り当てられ、昭和20年(1945)には8,300トンが生産された。



酒田高女での松根油採取作業の斧入れ式

戦時下の酒田家政女学校

酒田裁縫女学校（現在の天真学園高等学校）の昭和13年度(1938)の卒業アルバムには、軍需品の下請作業でミシンに向かう生徒の写真が掲載されている。勤労奉仕が本格的になるのは太平洋戦争開始以降だが、すでにこの頃から軍需関係の仕事をしていたことが分かる。

昭和18年(1943)に、酒田家政女学校と改称。学科は国民科、体練科、理数科、芸能科、増加教科（農業）と、戦時色の濃いものになった。

19年(1944)3月に、校舎が軍需工場に転用されることが決まり、県より新入生募集の中止を命じられる。授業も中断され、在校生は、神奈川県相模原陸軍造兵廠（※）、横須賀海軍技術廠、酒田の鉄興社、日新電化といった軍需工場などに分かれて働いた。

校舎は、帝国マグネシウム会社の青年学校、外国人捕虜の仮収容所、関東及び関西の無縁戦災者の仮収容所などにも転用されている。

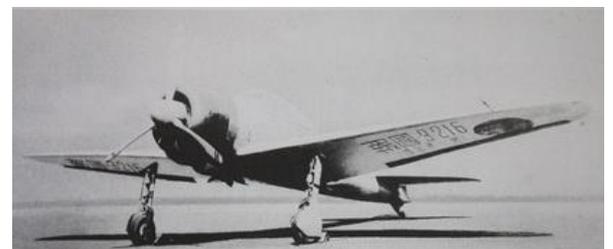
昭和20年(1945)8月10日の酒田空襲では機銃掃射を受け、爆風で校舎の窓枠がへし折られるなどの被害があった。創始者の齋藤又治氏は校舎近くの仮防空壕に避難。すぐ近くに命中したが、幸い無事だった。

生徒と保護者の熱烈な要望により、終戦の翌年から授業を再開した。

※造兵廠…軍の兵器を製造・修理する機関



昭和13年、軍需品の下請け作業をする裁縫女学校生



「軍用機献金募集」の張り紙をする家政女学校生(上)と、酒田市民が献納した酒田号(下)。戦時中、酒田市では市民から34万円の献金を集めて、陸海軍に2機ずつ、計4機の軍用機を献納している。本間家では単独で3機を献納した。

国民が強いられた負担 物資の配給統制、金属供出など

日中戦争が始まると、民需産業の軍需産業への転換、徴兵などによる労働力不足に伴って物資・食糧が不足し始め、昭和14年(1939)から米の配給統制が実施される。物資統制は、戦況の悪化とともに強化され、あらゆる食料品、日用品、衣料品に及んだ。

また昭和16年(1941)の「金属回収令」により金属供出が本格化し、鉄・銅・金・銀・アルミニウムなどの金属を使った家庭用品は、クギ1本まで強制的に供出させられた。ダイヤモンドなどの貴金属も供出させられた。

こうした統制の中心になったのは、昭和15年(1940)に成立した国民統制組織「大政翼賛会」の最下部組織である「隣組」だった。隣組は、町内会の下に数軒を1単位として置かれた。防空活動、配給、国債の割当、貯蓄の奨励などを行い、同時に相互監視の役割を果たした。



金属供出により鉄格子を切り取られた土蔵(旧八幡町)

酒田家政女学校19期生 58年後の卒業式

終戦前後の混乱のなか、多くの学生たちは卒業式を挙げることなく学び舎を巣立ち、社会に出て行った。この世代の人たちは、その後も苦しい生活のなかで懸命に働き続け、戦後の日本の復古を支えてきた。

昭和20年3月(1945)に卒業した酒田家政女学校第19期生も、学徒動員による労働に明け暮れ、きちんとした形で卒業式を経験できなかったが、終戦から58年たった平成15年11月、天真学園高校の創立80周年記念式典に合わせ、改めて卒業式が執り行われた。

19期の生徒数は169人。故郷を離れたたり、すでに亡くなった人もおり、出席できた卒業生は26人だった。

相模原造兵所に動員され、昭和20年の卒業式に代表として帰省した後藤小雪さん(当時17歳)は「ちゃんとした卒業式の気分が味わえた。感無量です」と笑顔で話していた。



酒田家政女学校第19期生(上)と、平成15年の天真学園高校80周年記念式典での卒業式

酒田家政女学校第19期生 後藤小雪さんの手記(抜粋)

思い出すのもつらく、夢なら覚めてほしいという言葉のとおり、たいへんな世に入学した私たちですが、上級学校へ進むのは一校から数人という時代でございます。私は進学できる喜びに胸をふくらませ、名前も新しくなりました酒田家政女学校に入学しました。8月ごろには中山晋平先生作曲の校歌ができ、喜んだのが昨日のことのようです。

しかし戦局はむずかしくなる一方で、学生といえども田植えや麦刈りなどに勤労奉仕としてかり出され、モンペ姿で農家に通った思い出もあります。

入学した翌年の19年に当校も閉鎖という悲しい事態に直面、いよいよ学業を続けることが叶わぬことになり、私ども150名は、国の大事を助けるために、産業戦士として働きに出ることになったのです。

私は23名の学友と共に神奈川県相模原造兵所で働くことになり、秋田県、新潟県の学生のみなさんと飛行機や戦車のエンジン作りに夜勤まで強いられ、「勝つまでは」の合言葉で、真っ黒になって働かされました。

20年3月、卒業を迎え、学校から卒業式に出席の指示がありましたにもかかわらず、私が代表としてやっと許可を得、出席したのでございますが、晴れの卒業式に出席が叶わぬ学友の卒業証書を胸に、再び上京しなければならなかった私を父母が涙で送ってくれました。

働いている最中に何度か敵の飛行機が飛来し、機銃掃射で工場の屋根を貫き、秋田の女学生の悲壮な最期を目の当たりに見てまいりました。

昨年(平成3年)、造兵所で共に過ごした皆さんと一緒に働いた場所(米軍基地)を見に行き参りました。ようやく私どもの心の中の戦いが終わったようでございます。

もう二度とこのような戦いがあるとは思えないことを、子や孫に教え伝えてゆかねばと思うこのごろでございます。